

ChatGPT を活用した英文エッセイライティング指導の試み

英語科 金子 麻子

本研究では、200 語程度の英文エッセイ作成の際に、ChatGPT からのフィードバックを得た高校 2 年生の生徒が、そのフィードバックをどの様に活用して最終版のエッセイを作成したかを検証する。また、エッセイ提出後に質問紙調査を行い、英語のエッセイライティングに ChatGPT を使用することに関して、生徒がどのように感じているのか、生徒の意識を調査した。

〈キーワード〉生成 AI, ChatGPT, ライティング, フィードバック, 質問紙調査

1. はじめに

2022 年 11 月に OpenAI 社が ChatGPT をリリースして以来、生成 AI は短期間で広く社会に浸透したが、それは教育現場においても例外ではなく、文部科学省は 2023 年 7 月に「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」を取りまとめ、教育現場における生成 AI の利用に関する指針を示した。2024 年 12 月には、その改訂版 (Ver.2.0) が提示され、生成 AI は「有用な道具になり得るもの」であり、教育活動にとって「効果的であるかを吟味」して利用すべきとしている。具体的な活用事例として、英語学習においては「より自然な英語表現への改善」が挙げられており、生成 AI に生徒が作成した英文の文法的な誤りを指摘させ、それに対する修正案を提示させるなどの活動が考えられる。そこで、本研究では高校 2 年生 108 名の書いた 200 語程度の英文エッセイを ChatGPT に添削させ、ChatGPT からのフィードバックを生徒がどのように活用するかを調べた。

2. 英語教育における生成 AI 活用の現状

前述の通り、2022 年の登場からわずか 1 年で教育現場において ChatGPT をはじめとする生成 AI が広く使われるようになり、英語教育学会の研究大会で生成 AI を活用した研究事例が発表されたり、学会誌においてその実践事例が報告されるようになった。例えば、リーディングの分野では Watanabe & Saida (2024) が、大学入試共通テストの英語のリーディング問題を ChatGPT に解かせたところ、その正答率が平均 91.3 パーセントであったことから、テスト問題の確認に ChatGPT を活用する可能性について論じている。ライティングに関しては、山西 (2024) が大学生の英文ライティングの指導に ChatGPT を導入した事例を報告している。英文ビジネス E メール作成の際に ChatGPT を利用した学生 (大学 2 年生) は、ChatGPT から質問に対する回答を即座に得ることができることを魅力的だと感じており、ChatGPT の利点として、複数の質問や細かな質問を気軽にすることができることを挙げていた。学生は自身の関心に沿って能動的に参加し、それが探究心の高まりにつながったと言う。蔵 (2024) は高校 1 年生を対象として DeepL Write を用いたライティング活動を行い、生徒が高い確率 (98.3%) で誤りを修正できており、生徒は AI の有用性を実感していると述べている。また、2024 年 6 月の「英語教育」増刊号では、生成 AI の実践事例特集が「英語教師のための生成 AI 入門ガイド」のタイトルのもと出版され、現場の教員が生成 AI を利用する際に多いに参考になる詳細情報が提供されている。2025 年 3 月開催の JACET 教育問題研究会主催の「言語教育エキスポ 2025」では生成 AI に関する特集が組まれ、全 68 発表のうちの 41 発表が生成 AI に関する発表であった。このように、校種、技能を問わ

ず、英語教育の現場でも生成 AI は広く活用され始めている。

3. 対象生徒およびエッセイテーマ

本研究の対象生徒は著者が「英語コミュニケーションⅡ」を担当する高校2年生3クラス113名である。「英語コミュニケーション」は、話すこと（発表・やりとり）、書くこと、読むこと、聞くことの4技能5領域をバランスよく取り扱い、生徒の英語コミュニケーション力を高めることを目的とした科目である。本研究に参加した生徒は、使用教科書「Crown English CommunicationⅡ」（三省堂）Lesson 8 Invisible No Longer を読み、コートジボワールのカカオ豆産業に従事する女性労働者たちが社会的に不当な待遇にあることを学んだ。関連して、日本のジェンダー問題についてディスカッションをする過程で、2024年のGlobal Gender Gap Indexにおいて日本が参加146地域中118位に位置していることを教員（著者）が提示した。その後、“Japan is ranked 118th in the Global Gender Gap Index in 2024. What do you think about this fact? What should be done to close the gender gap in Japan? Write an essay in about 150-200 words.”の指示文のもと、英文エッセイ課題に取り組んだ。読むことと書くことを関連付けた活動である。

4. ChatGPT を用いた修正活動

前述の英文エッセイを作成後、生徒は教員の用意したプロンプト「高校生が書いた、日本におけるジェンダーギャップをテーマとした以下の英語エッセイを読み、文法的な誤りや誤字脱字がないか確認してください。間違っている部分は箇条書きにして、修正案とともに提示してください。内容面でもアドバイスをお願いします」（古藪、町村、藤城、2024 を一部改変）を使用し、無料版 ChatGPT に文法的誤りの指摘と修正および、内容に関するアドバイスを依頼した。その際、教員がサンプルエッセイを用いて実際に ChatGPT を使用する手順を提示しながら、即時のフィードバックを得る過程を示した。その後、生徒らは同様の手順で各自デバイスを使用して ChatGPT からのフィードバックを得た。そして、ChatGPT の提案した修正をもとにエッセイを書き直し、①初版エッセイ（ChatGPT の手が入っていないもの）、②ChatGPT による誤りの指摘と修正案をコピー＆ペーストしたもの（ChatGPT からの修正案に納得ができない場合には、なぜ納得できないかの理由を記す）、③最終版エッセイの3点を提出した。教員は、①～③を読んだうえで、ChatGPT が指摘していなかった文法的誤りの指摘・修正や内容面の助言を与えた。

5. ChatGPT と教員からのフィードバック

5. 1. 各種フィードバックの全体像

生徒の提出した最終エッセイに対する ChatGPT および教員からのフィードバックの全体像を表1に示す。生徒108名分のエッセイ（平均語数192語）に対して、ChatGPT からは合計1718件（1エッセイあたり平均15.9件）の文法的誤りの指摘・修正案が与えられていた。一方で、内容面に関する助言は合計288件（平均2.6件）だった。教員からの文法的誤りの指摘・修正は379件、内容面に関する助言は124件だった。

表1 エッセイに対する各種フィードバック（全体）

		全体数	1エッセイあたりの平均
ChatGPT からのフィードバック	文法的誤り	1718	15.9
	内容	288	2.6
教員からのフィードバック	文法的誤り	379	3.5
	内容	124	0.8

5. 2. ChatGPT によるフィードバック

5.2.1 ChatGPT による文法事項に関するフィードバック

ChatGPT が指摘した文法的誤り（主な誤りのみ）を種類ごとに分類したのが表 2 である。

表 2 ChatGPT による文法的誤りの指摘の例

種類	件数 (全体)	誤用例	修正案	理由
スペリング	17	dairy life	daily life	dairy 酪農の, daily 日常の
冠詞	130	There is the gender gap in Japan.	There is a gender gap in Japan.	gender gap は特定の固有名詞ではなく, 不特定の概念を指しているため, 冠詞は a が適切です
大文字・小文字	33	they Feel ...	they feel...	
語彙・表現	884	22th	22nd	序数詞の表記の誤りです
前置詞	104	According to the article of PRESIDENT Online,	According to an article on PRESIDENT Online,	article of は不自然であり, an article on が正しい表現
文の流れ	26	maternal mortality rate, so GGI tends to rank the developed countries...	maternal mortality rate. As a result, GGI tends to rank ...	一文が長すぎるため, so を as a result に変更してフォーマルな表現にします
文構造	108	However, it is not enough to just realize.	However, realizing is not enough.	realizing を主語にする方がわかりやすいです
品詞	33	...can't definite the gap	...can't define the gap	動詞の形が誤っています。define が正しい形です
助動詞	9	so that women may work...	so that women can work...	may よりも can が適切です
名詞の数	146	one of huge problem in Japan	one of the huge problems in Japan	one of の後には複数形の名詞が必要です
名詞の格	14	women success...	women's success	「女性」は所有格になります
be 動詞	19	jobs that is more...	jobs that are more...	jobs that are と複数形を使うべきです
動詞の形	12	we should stop to say	we should stop saying	「するのを止める」は stop...ing で表現します
関係詞	14	I would like to propose two initiatives that Japan needs to take, it is...	I would like to propose two initiatives that Japan needs to take, which are...	it is ではなく, which are とすることで前の文の内容を説明する関係代名詞の使い方が適切になります
目的語の脱落	7	the majority of people who discuss is...	the majority of people who discuss it is...	the majority of people who discuss は the majority of people who discuss it とした方が自然です
副詞の位置	11	I realize strongly the need to...	I strongly realize the need to...	

様々な文法的側面の誤りをその理由とともに指摘し、代替案を提案している。以下に、主な指摘の例を挙げる。

「表現」に関しては、単純に語彙の誤りを指摘するだけでなく、生徒の書いた “we should decide the roles even though not only girls.” という文の要素が整わず本意が伝わりにくい誤りに関しても、“we should assign roles

based on ability, not gender.”というように、前後の文脈から判断して書き手の意図を文法的に正しい形およびわかり易い表現に修正した案を提示しており、その性能の高さがうかがえる。definite（形容詞）を define に修する品詞の修正、“This situation is ignored for many years.”という現在形の文を、“This situation has been ignored for many years.”の様に、日本人にとっては使用が難しいと言われる現在完了形に修正する時制の修正など、様々な文法事項に関して、適切な提案がなされている。関係詞に関しては、“Companies should make environment that everyone can work comfortably.”と誤って関係代名詞が使われている箇所を、“Companies should make environment where everyone can work...”の様に、正しく関係副詞に修正している。また、“childcare center set up in workplace.”の様な、動詞に対して適切ではない主語が使用されている場合も、“childcare centers should be set up in workplaces.”と受動態に修正するなど、文構造を大きく変えた修正も行っている。ほかにも、“...maternal mortality rate, so GGGI tends to rank...”を“...maternal mortality rate. As a result, GGGI tends to...”というように、文法的な誤りではないものの、口語的な表現をよりアカデミックな表現に修正するなど、多岐にわたる高度な提案がなされていた。エッセイ 1 本あたりの文法的修正が平均すると 16 件弱と、修正件数が多いだけでなく、その提案の質も高く、また多くの場合は納得のいく理由が記されており、ChatGPT の性能は想像以上であった。

その一方で、文法的誤りとその修正の理由に関して、「...の方が自然です」「...とします」の様に、ごく短い理由だけを提示していたり、理由が全く提示されていなかったりするケースもみられた。このようなフィードバックだった場合、生徒がなぜ自分の用法が間違っているのかという理由を正しく理解できなかった可能性もあり、説明が不十分な場合も少なからずあると感じた。

5.2.2 ChatGPT による文法事項に関する誤ったフィードバックや学習効果の阻害

ChatGPT のフィードバックが誤っている例が 4 件みられた。わずかな件数ではあるが、ChatGPT の指摘が全て正しいわけではないということを生徒・教員がともに念頭におく必要があるだろう。例えば、生徒の書いた“Another thing Japan must do is getting rid of existing stereotypes and norms.”という文に関して、“Another thing Japan must do is get rid of existing stereotypes and norms.”という修正案が提案されていた。理由は、““Getting rid of”ではなく“getrid of”を使うことで、動詞の形が一致し、よりスムーズな表現になります”とあったが、get rid of 部分は be 動詞の補語となっており動名詞 getting または不定詞 to get にする必要がある。生徒が使用した getting が文法的には正しい形であり、get にすると誤りになってしまう。ChatGPT は、直前の must do の do と形を揃えることを提案しているのだが、ここでは do と get では文中での働きが異なるため、この二つの動詞の形をそろえるというのは文法的に正しくない指摘となっている。生徒にこの判断ができない場合、ChatGPT の提案に従ってしまうため、注意が必要である。

また、生徒が使用した表現が誤りではないにもかかわらず、ChatGPT が代案を提案している例も 12 件みられた。たとば、生徒の“we had better not accept the fact easily.”という文に対して、「had better not はやや強すぎる口語表現で、よりフォーマルな表現を使用します」という理由で“we should not accept the fact at face value.”を提案している。だが、学習の段階を考慮すると高校 2 年生の現段階では had better not と should not の表現の違いを厳密に検討する必要性は低く、むしろ had better not というやや難易度の高い否定表現を積極的に使用している点は肯定的に評価したいところである。ほかにも“This occurs due to the characteristics of the index itself.”を“This occurs because of the characteristics of the index itself.”に修正（理由「because of の方が自然な表現です」）、“not only should we arrange conditions which promote women to work...”を“not only should we arrange conditions that promote women to work...”に修正（理由「that の方が適切な表現です」）など、「どちらでもよい」指摘があり、生徒はやはり「which ではなぜ適切ではないのか」と疑問を抱いたようであった。さらに、Japanese

girl を、「より自然な表現」であるという理由から girls in Japan に修正することを提案したケースもあった。

「英語母語話者が使用するより適切な表現」を目指すのであれば納得のいく指摘ではあるものの、学習段階を考慮すると、両者の微妙な違いについて検討する段階ではない時期にこのような提案が多くされると、生徒がその全ての指摘を理解・修正する必要があると感じた場合、学習者への負担増につながるものが危惧される。教員が学習段階と個人の能力を判断し、取捨選択しつつ個に応じたフィードバックを与える方が、高い学習効果に結び付くのではないだろうか。

5.2.3. ChatGPT による文法事項に関するフィードバックに対する生徒の判断

これまでは ChatGPT の文法的修正を生徒が受け入れた事例を紹介してきたが、生徒は ChatGPT からの指摘をすべて受け入れたわけではない。ChatGPT の使用にあたり、教員からは「必ず ChatGPT の指摘を吟味し、その指摘が正しいと判断した場合のみ、修正をすること」と指示しており、生徒はその提案が正しいかどうかを吟味していた。そのため、ChatGPT からの提案を自分なりに修正して採用したケースが 27 件、提案の採用に至らなかったケースが 60 件あった。

例えば、“we make another new reverse discrimination.”という生徒の文に対し、“we create another form of reverse discrimination.”（理由「another new は重複した表現なので another form of に修正します」）という提案があったが、これに対して生徒は「another new が重複した表現であるというのは納得できたが、another form of に変えるくらいならこの表現は必要なく、we create reverse discrimination のみでよいと感じた」とし、この箇所を“we create reverse discrimination”と修正した。このように生徒が ChatGPT の修正を受けて、自分の意図が読み手により良く伝わるように、修正案をアレンジしながら、最適な文への変更していくことができれば、学習効果もエッセイの質も高まるだろう。

5. 3. 教員によるフィードバック

ChatGPT が指摘しなかったが、教員が指摘した文法的誤りや代替表現の提案は 503 件（文法的誤りの指摘・修正 379 件、内容面での助言は 124 件）あった。やはり ChatGPT の指摘は完全ではなく、教員によるフィードバックも必要ということだろう。

特に、文法的なフィードバックのなかでも、語彙の適切な使用に関しては、ChatGPT の指摘が不十分なことが多かった。たとえば、“It is not bad that there are more men than women in a field, because...”という文に対して、ChatGPT からは何も指摘はなかったが、bad という語は稚拙でありその含有する意味もかなり広いため、ここでは“The fact that in some fields there are more men than women is not a problem itself since...”などの表現に直した方が、よりアカデミックなエッセイとなるため、教員からはこの様な修正案が与えられた。特に、既に基本的な文法事項が定着している生徒に対しては、次のステップとして、よりアカデミックな語彙や表現を用いてある程度複雑な文章を書けるようになることを目指すために、この様な提案が必要になってくるだろう。だが、この種の助言は、生徒一人一人の能力を把握した教員ではないと与えることができない。ChatGPT の能力の限界を教員が正確に把握し、それを補うように努めることが教員にとって求められるのだと強く感じた。

しかし、教員が読む前にあらかじめ ChatGPT がある程度の文法的誤りを修正しているために、教員はそれらの誤りに関してはフィードバックを与える時間と手間を省略できる。このため、教員は前述のような生徒一人一人に応じた助言を与えたり、より適切な表現の提案や内容面での助言に関するフィードバックに時間を費やすことができるようになる。これが ChatGPT を用いることの大きな利点である。特に、文章の流れや、論理的な構成にするための助言などを多く与えることができ、「単純なスペルミスや機械的な文法面での誤り

は ChatGPT に、内容面や論理構成面、アカデミックな表現に関しては教員」という、意識的なフィードバック分野のすみ分けをすると、より効果的な助言を生徒に提示できるようになるのではないかと考える。

6. 生徒の反応

生徒は特に問題なく ChatGPT を利用し、他教科の課題にも既に ChatGPT を利用している生徒も多くいるようだった。なかには、ChatGPT の修正を得た後書き直したものをさらに ChatGPT に通したり、疑問点を ChatGPT に尋ねて解決していくなど、著者が想定していた以上に ChatGPT を上手く活用している生徒もみられた。

ChatGPT を使用することに関して生徒がどう感じているか調べるため、エッセイ提出後に質問紙調査を行った。生徒には回答内容はエッセイの採点には全く影響を与えないことを説明し、授業で通常使用している学修プラットフォーム (Moodle) を通してアンケートに回答するよう依頼した。その結果の一部を図 1～3 に示す (回答数 52 名)。

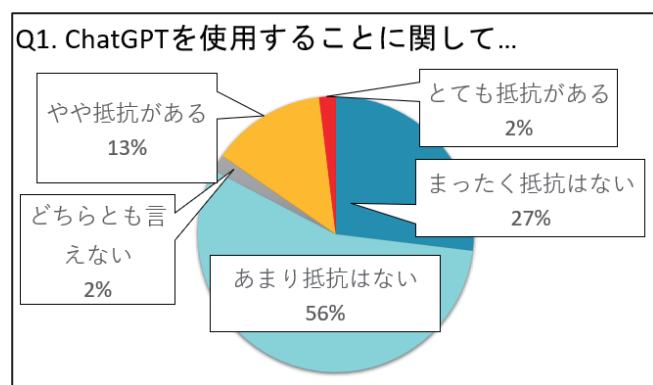


図 1 ChatGPT を使用することに関する抵抗感

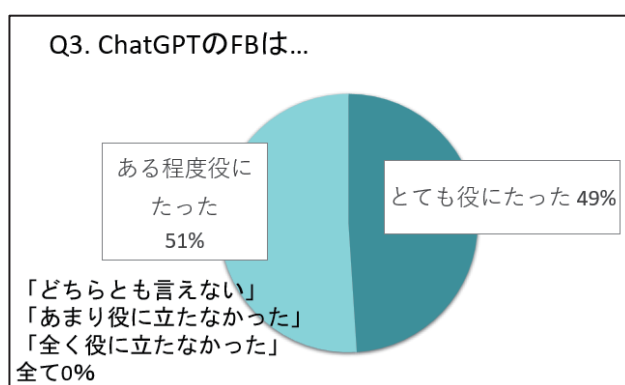


図 2 ChatGPT からの FB の有用性

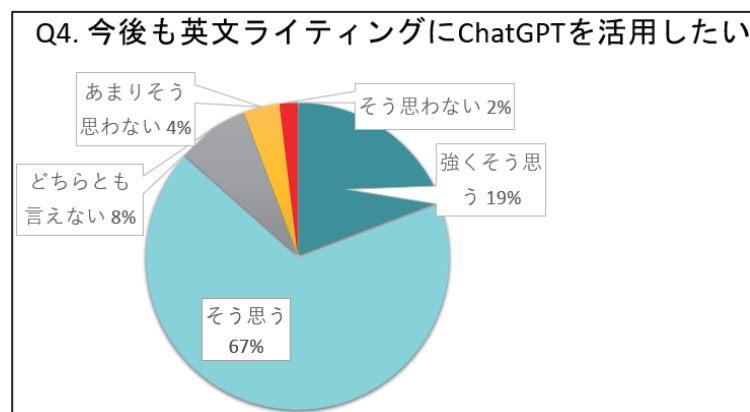


図 3 今後の ChatGPT の活用

エッセイ作成に ChatGPT を利用することに対して「まったく抵抗はない・あまり抵抗はない」と回答した生徒は 82.69%で、前述の様に既に他教科の課題に使用している生徒も多く、全体的には抵抗感は少ないようだった。その一方で、「やや抵抗がある・とても抵抗がある」と回答した生徒は 15.38%で、その理由として、「内容に関するフィードバックで GPT が誤解答をしていたので、あまり信用できないなと思ったため。」「自分の間違いに気づくことができたが、なぜ直した方が良いのか理由が書かれていなかったから。」などが挙げられた。生徒も ChatGPT が完璧ではないということを理解しており、また、理由に関しても不十分だと感じているようだった。

エッセイに関する ChatGPT からのフィードバックを「とても役にたった・ある程度役にたった」と感じている生徒は 100%だった。生徒はその有用性を理解していることがうかがわれる。だが、今後、英語のライティング課題に関して「ChatGPT を活用したいと強く思う・思う」生徒が 86.53%だったのに対して、「あまり思わない・思わない」生徒も 5.76%いた。その理由としては、「あまり AI を信用していないから。」「今回のように、後からフィードバックしてもらって添削用には活用してみたいと思うが、やはり間違った提案をされることがありそうだなと思う。」「AI に添削されたり、評価されるのはあまり気分がよくないから。」などの意見がみられた。ChatGPT からのフィードバックが有用であると感じ、今後も活用したいと思う生徒が多くいる一方で、生徒はその能力が完璧ではないことも適切に理解しているようだった。

自由記述欄に書かれた生徒からの意見は以下の通り（原文ママ）である。

・私は自分の書いた文章であれば、日本語の文章でも英語の文章でも常日頃 Chat GPT に添削させています。大体 Chat GPT は私よりもいい文章(わかりやすく簡潔な文章)を思いついてくれるため、学びになっています。納得いかない添削がある時は別の AI や Google 翻訳等に二重添削のようなことをさせて色々試しています。Chat GPT 等 AI とは常に疑い半分の気持ちを持って過信しすぎなければ、どんどん利用していくと良いと考えました。

・ライティングを最初からすべて書いてもらうのは、良くないと思うし、自分の英語の上達にも繋がらないと思うが、自分が書いたものを添削してもらうのは良いと思う。

・エッセイを 1 から書いてもらう目的ではなく、自分で書いたものをよりよくする目的なら ChatGPT を利用しても良いと思った。

・採点などを代わりにやってもらうことは正確で良いと思うが、もう少し chat GPT の精度が上がって ChatGPT のチェックをしなくて良くなったら、効率的だと思う。

・ChatGPT を使うと、すぐに間違いを指摘してもらえるので、ライティングの勉強になると思う。ただ、AI を過信してはいけないので、あくまで参考程度に活用するのがいいと思う。今回のように、始めから ChatGPT に頼るのではなく、自分で作成した英文をチェックするために利用するのは、とても役に立つと思った。

・私は、ChatGPT が出てくる前から grammery や grammar checkerなどで文法をチェックしてもらったり、新たな表現を参考にしたりしていたので、ChatGPT を使うことに特に新鮮な感覚はなかったですが、論理的な部分などでのアドバイスをしてくれる点は優れていると感じました。しかし、論理の構築を一から ChatGPT にさせると文章の独自性が失われるのでその点は留意すべきだと感じました。

・その場しのぎの修正にならないように一人一人が意識しなければ良い効果はあまり出ないのではないかと考えた。

・同じプロンプトでも ChatGPT は異なる回答をすることがあった（指摘項目、訂正内容が違ったりなど）。一気に指摘してくれたり、同じ形式の回答にしてくれたりするプロンプトにすると良いのではないかと考えた。また、英作文に対する chatgpt の回答はほとんど問題がなく採用することになるので、指摘を採用しなかった理由よりも採用した理由を書かせてほしいと思った。

・文法など簡単なミスを指摘してくれるので、労力が省けてよいと思う。ただチャット GPT だけで終わりにするのではなく最後は人の手で確認するべきだとおもう。

・単語の言い換えや文法ミスの指摘など、簡単に直せて、且つ、英語レベル向上に役立ちそうな機能については ChatGPT を利用していくことに賛成です。しかし、文章を全て書いてもらうことに関しては、もともと自分で書いた原型がなくなってしまうそうだったので、あくまで指摘を読むだけにして、修正前と修正後で全く違う人物が書いた文章のようにならないように注意する必要があるかなと感じました。

・セカンドオピニオン的な感じで、ChatGPT の回答をあくまで提案として受け止めていく必要があると考えた。

・このような機会に頼るのではなくしっかり自分で考えて、人の手で完成させた方がよいと思いました。

・文法的な間違いを知り、今後に生かしていけるので良いと思う。しかし、何度も修正をかけると際限ないため、修正案は今回のように1回だけだすようにし、基本的な文法の誤りを直したり、内容面のアドバイスを参考にするといった軽めの使い方をすべきだと思った。

・基本的に活用に賛成です。ただ、特に論理的思考についてのアドバイスはかなり鋭いですが、議論を続けると最終的に得られる回答は、元の主張からかなり離れたところまで話が広がっていることがあります。それをいかに生徒自身が自分で気づき軌道修正するかが問題なわけですが、chatGPTは完全無欠なものではないという意識は忘れてはならないと思います。

・チャットGPTは初めて使ったが、あまりにも優秀すぎて問題の条件に合った完璧なエッセイを書いてくれるので、全てをチャットGPTに頼るのではなく、今回のように一度自分で書いてみてから修正してもらうなどという形で使用しないと、自分で書く力がなくなりそうだとも思った。

・今回のように自力で一回書いたものを推敲するときにChatGPTを利用するのは効果的な学習になるのではないかと考えた。

・何が違うかわからない時が多いから、英語得意な人ですぐに質問できる人が近くにいるといいなと感じた。

・チャットGPTを使ったことがなかったので、初めて使ってみて、便利だし、大体正しいことを教えてくれると思ったが、最後によく書けているみたいなのが書かれていて、先生がそう書いていたら嬉しいけれど、AIに書いていると思うと、上からだなと思った。

・私の最初の文に間違いが多すぎたのが原因ではあるが、13の全部の文を変えられてしまったのが少し悲しかった。また、添削をしていくうちに自分の原文から離れていってしまう感覚はあったのでそこは気を付けなければいけないところだと思う。

・ChatGPTが正しいことを述べているのかということを判断する為には、最終的に自分の英語力が必要になるため、ChatGPTに全てをまかせきるのではなくて、間違いがないかの見直し程度に使えるようになるのがベストであるなと思った。

・ChatGPTは上手に表現やミスを直してくれるが、実際に英語圏の人がみたらどうなのかという点や、知的過ぎて逆に分かりにくい文章になってしまわないかという点を不安に思う。

・ChatGPTからのフィードバックを読んだ上でなぜ変更した方が良いのかを自分で調べることで英語力の向上につながるのではないかと考える。

・ChatGPTに最初から書かせるのは、自分にとって何の良いこともないため、使用するのであれば、今回のように添削をお願いする形で活用すべきだと思う。ChatGPTを使用して課題を行うことに対して、抵抗を感じていたり、規制を設けたりする人もいるかもしれないが、適切な使い方をすれば、より良い結果を得られて、自分自身の能力も高められる可能性があるため、個人の判断によって使用法を決められるようにすると良いと思う。ただ、使用法については助言や多少の規制は必要に応じてあるべきだと思う。

7. まとめ

ChatGPTは、高校生のエッセイライティングに関して、文法的誤りに関しては適切でわかり易い指摘と修正案を提示しており、生徒はそのフィードバックを有用であると感じていた。一方で、ChatGPTの指摘だけでは不十分なケースもあり、教員の確認は不可欠である。特に、文法的に誤りではないものの、より良い表現を提案したり、内容面や構成に関する助言などはChatGPTのフィードバックでは不十分であると感じた。だが、冠詞や動詞の形などの形式的な文法上の誤りの多くをChatGPTが先に指摘・修正していると、教員は内容面や表現の工夫の提案に時間をかけることができ、生徒のエッセイに対してより質の高いフィードバックをすることが可能となることがわかった。

もちろん、生徒がChatGPTの指摘を吟味し、合理的な指摘であると判断できる時のみ、その指摘を受け入

れるなどの判断することができるように指導する必要があることは言うまでもない。進化し続ける技術やツールを、生徒が有効活用することができるよう、今後もサポートしていきたい。

(本論考は、2025 年 3 月 2 日開催の JACET 教育問題研究会主催「言語教育エキスポ 2025」における著者による口頭発表「生成 AI を活用した高校生のエッセイライティングの指導」に追加・修正を加えたものである。)

参考文献

Crown English Communication II (2024) Lesson 8: Invisible No Longer. 三省堂

Watanabe & Saida (2024). ChatGPT's Performance on the English Reading Sections of the Common Test for University Admissions in Japan. *KATE Journal*. Vol.38. 155-168.

World Economic Forum (2024). Global Gender Gap Report. <https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2024/digest/>

古薮, 町村, 藤城 (2024) 「生成系 AI で変わるライティング指導 – ChatGPT を活用した授業実践」『英語教育 9 月号』(大修館書店), 36-37

彦田泰輔 (2024) 「公立中学校における生成 AI を活用した英語意見文指導の充実」 関東甲信越英語教育学会 (KATE) 12 月例研究会発表

蔵知英 (2024) 「高校生ライティング指導における AI ライティング添削ツールを用いたフィードバックの効果と学習者の反応」 英語授業研究学会紀要 第 33 号, 163-175.

文部科学省 (2024). 「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」(Ver.2.0) https://www.mext.go.jp/a_menu/other/mext_02412.html 2025 年 2 月 9 日引用

山西 宏明 (2024) 「ChatGPT を活用した英文ビジネス E メール作成能力を向上させる取り組み」 富山短期大学紀要第 60 巻, 86-100